

飢餓脱走記(上)

大谷正夫

あれは数年前の、様に冷たい冬の夜、十二月のある夜の出来事だった。

俺はこの日、アンの宿門、正月を目前にしながら、一向に溜らぬ金に焦りを感じ、バチンコ屋に入っただのが運のつき、一銭も残らぬ才力になつた。しばらく残念で台をにらんでいたが、思い直して、大バチンコ店を出る。力がい足取りで歩き出す、とたんにえも言われぬ空腹感がおどってくる。考えて見れば、夕食もまだ食ってないのだ。怖くてから食おうという助平根性から食っていなかっただけ。

さて、今晚これからとないしようと歩きながら、考え出す。腹の中にもいろいろな人の腹が浮んでは消え、走馬燈のように駆け回るが、一向に良策は考えられない。

丈夫だ。

俺達は、みんなして薪を取りに行く。俺はついでにシワモクも五、六本拾ってくる。みんなそれぞれ紙を敷いて寝る。でも、前を向けば背中が寒く、後を向けば前は寒い。これでは本当に眠ることはできなそうだ。仲間の中に、話の上手な男がいて、みんなを笑わせていた。

この頃、巡回の赤り公が二人やってきて、火を消せとめかす。俺達が、金はなし、寒くてやり切れんからたま火をしてるんだ。こは、火受の心配もないんやし、又十分注意しますから、警察の旦那、大目に見て下せえ、といくら頼んでも、赤り公は耳も借さず、付近の民家から借りたバケツに水を汲んできて消してしまふ。

困っている俺達の火を消しやがって、ト、ト、ト、以上苦しみようとしやがる。他の仲間達も口々に赤り公の悪口を言う。俺が、「喉、太、赤り公とは、うすく名付けた。喉のように」

とにかく一応、現しい反人に頼んで見ようと思ひ、清水君の宿を訪れる。皮肉な事に、彼も又、ホートレースで寒貧になり、俺から借りようと思つていたらしいので、これでは話にもならない。

帳場に頼んで、トヤ銭借りをしようかと思つてもみたが、現在の宿に移つてから十日程しかた、ていがない。どうせ無理な話だろうと思ひ、諦めて青カン雙店でセンターに向う。センター前のカード下に十四、五人の仲間達が火を囲んでいた。仲間達がそれぞれに話す事は、俺とにちようなものだ。パチンコやヤンフルで負けた者、運悪く仕事にアズレた者。冷えきった体に火は本当に有り難い。また、一人でいる寂しさや不安より、同じ境遇の仲間達が大笑している方が、何だか心

にくくて、ちくちく、寒い匂いがアンプンして、金持の番犬としてワンワンほえる事しかせん奴だからな。おい兄弟は素直らしい名付親だぜ」と言え、仲間達の中から、小さな笑いが湧く。

何分、寒くてたまらないで、俺達は又たき火を始める。

夜の更けるに従つて寒気は厳しさを増す。仲間達の話す言葉も、なんだか元気が無くなってくる。みんなそれぞれに思案しているのだろう。俺は今言えているように、俺はこんなことを考えていた。前に青カンした翌日はまあ仕事にありつた。けど本当に少しも眠らず、まる一昼夜絶食の上での労働だからきつかつた。でも割り合ひ楽まつたから良かったけど、明日はどうだろうかな。きつい仕事だとこが、ちやうな。一番良いのは、仕事を持つているうちに、朝、金借りて飯も食い、煙草も買えたらええけどな。とにかく、明日は必死で仕事を探さう。みんなも

俺と同じような事思っこんだろな時と、
とりとめない事を考えていた。煙草吸いたい
なと思っただ、シゲモクは幾一本、正直には
半分しか残ってないの、もう少し復吸
う事にする。

無言の行のようになつた附けざに耐えかね
たように仲間の一人が言い出した。

「俺はな、今考えこんだのや、ホリ公の前で
小さな力ッパライか何かさ、やらかしてスワ
痛に入れてもらうとな、スワ痛はな、寒風に
さらされる事もないんやし、毛布も着て寝れ
るんや。青カンをする事思つたら、天国やで」
他の一人が相槌を打つ。

「ぼんまにそれの方がええかも知れんな、
けど前科つくのは嫌やな」

この仲間は、警察は悪い所という先入観と、
現実の苦痛とをばかりにかけつけているに
けより真剣味が出る。

前の一人が言う。

「百円ぐらいの品物のか、ばらにで、前科

しかし、青カンで苦しむ仲間達の多くは夕
コ部屋を警戒し、一日位、飯なんか食わなく
た。飯は嫌だという。過去において、
かいふん、痛めつけられた事があるの、
俺も飯場を十軒余り歩いてるが、本格的な
夕コ部屋には当っていなかった。

結局、俺達三人だけが行く事になった。夕
コ部屋で連れられていった先は、上新庄にあ
った福西組という典型的な暴力団だった。
手配師は訪問につくなり、態度を豹変し、
俺達を怒鳴った。

「手前ら、ここを何処だと思つてゐるんだ。

近く子も怒る福西組だぞ。山口組の系で
あり、尾崎の村上組は兄弟分だ。他所の系で
でのようになめた事をしゃがると、手前らの
一匹や二匹、すぐに打ち殺すぞ。ここは天下
にや、なめやがった奴が何匹理まつてゐるか
わからんのだぞ。ええか、よく聞いておれ
んようにしやがるんだぞ」

俺は内を舌打ちした。とんでもない所へ来

までつくかえ、一晩スワ痛天国に泊りゃお終
いのまきさ。

前の仲間の話を、俺の仲間は感心したよう
に台詞しながら聞いている。

そこへ、ホリ公が再びやって来て「さっき
おしたのに又だ。今度やつたら承知せんと」
とぬかし、再び消さうとする。仲間の一人が
文句を言うと、ホリ公がぬかす、「じゃます
ると公務執行妨害でパワルぞ」と。

ホリ公が火を消して去り、俺達も、これじ
やあ仕方がないなと言ひながら、この場を去
うとしている所へ、俺達三人を連れて行っ
た。運命の手配師が来る。時刻は午前0時前
後だったろう。

手配師が俺達に示した条件は、日給千五百
円、あずけ無し、飯代三百円、毎日貸し三百
円、仕事は建築現場の土工作业で比較的楽な
仕事という事である。

当時の労働条件は、おおむねこんなもので
あった。

とちと思ふ。如の二人を更れば、善白な顔を
して血の気がない。

部屋にはストーブがたかれており、イスに
腰掛けた三人の男が、刀や入墨をちらつかせ
俺の視線も四、五本見える。取らは見張役で
ある。朝まで監視つきとは、全く驚いた飯場
である。俺達三人は手配師に「さっさと飯を
食らえ」と怒鳴られ、外米ではらばら飯に、
何も入っていないみそ汁、こうこう切で晩飯
を食った。俺達も飯を食い終ると、手配師が
部屋に入れと言ひ、床の指定をすると出て
行き、外からカヤを掛ける、部屋を見れば、

『裸詩歌句集』 作品抄 ①

(一九七〇年十二月刊)

生きるとは人こ食わねは食えぬ世か突き
どはされて今もアアれる(吉谷四郎)
青カンを喰ひてとして頭を呑み酔えは死
期は中絶者あわれ (田中祐彦)

※ 作品抄②は三三ページ

四十何人か寝ている。この部屋には、新聞も雑誌も見当たらない。勿論、テレビ・ラジオは無い。フutonは何年か汚れないのだろう。汚れて黒光りしている。こんな汚れたフutonを見るのは初めてだ。部屋の中には、吐気のする臭気がある。俺達も寝床に入る。枕は三寸角で、二間のバタ角だ。フutonの下に這いている。

翌朝、腹にカーンというショックを受け、目を覚ます。起床の台所に、追回しの野郎が、ハンマで俺達の枕であるバタ角を、しばきやがったのだ。時刻は午前四時三十分。昨夜、俺と一緒に来た一人が言った。

「まだ表は暗いぞせしと。」

すぐ追回しの一人が飛んで来て、

「馬鹿野郎、寝ぼけやがって、手前見てえな新入りが、よくも一人前の口をききやがったな、このこけね」と、いきなり殴りつける。

この新入りは鼻血で腹を黒赤にして、

回しのうち三人が追いかける。逃げる男は、足の早い男で逃走する者を引き離して行く。

俺は心の中で、上手に逃げれば良いと思って、いたが、期待は裏切られた。追回しの一人が自走車で追いかけたからだ。逃げた男は、遅れもどされ、スパナで殴られて腹は割れ、血が流れ鼻血を出し、顔ははれ上がっている。この仲間も、この時より傷の手当も受けないまま、俺達と同じように、実に一昼夜半にわたって連続作業をさせられる。

作業の内容は、土工仕事でも重労働の部類に入る地下の掘方だ。追回し共は上から見えてやがって、もっと早く掘れと土のかたまりを投げつけやがる。

昼の弁当は、例の外米に塩干一つだ。さすが追回し共も、この弁当には気持ちとがめるのか、他の職種の労働者に見られないように、匂をつけよ、と言い、パネルで他から見えないように囲う。俺達はこの弁当を食って、翌日の夜八時半頃飯場に帰り着く。又例のみぞ

「どうもすみません——」と恐れおののきつつ哀願して、や々と許してもらう。

皆、俺も汚れた飯を食う。水道は屋外にあり、屋外に出せば逃げるから、俺も汚れさせないとの事。食事を終り、皆に煙草（新生二十本入）一ヶ配給される。紙切れに新生一ヶと書き、自分の名前を記入し、籠に入れる。この竹筒は、背丈が人間の体長ほどあり、直径が三尺程もある代物だ。不思議な事に、この大きな入れ物は半分近くも満ちている。

煙草を受け取った者より外に出る。入口より俺達が乗る水口まで約二間程の距離なのに、追回し共が人垣を作っている。車にかけられている水口には、客員に解けないように、一ヶ所ほどに結束している。人垣を通って俺達が乗る。追回し共は最後に乗り込み、後部を固める。

俺達の乗った車は七時少し前に作業現場につく。追回し共が降り、俺達が降りている途中、一人の仲間が必死に走って逃げ出す。追

汁と漬物だけだが、働いた日だけ、酒（二級）二合を飲ませるらしい。紙切れに書き例の籠に入れる。

俺は、メチャクチャにつかれていた為、何も考える事も出来ず、眠ってしまう。

翌朝の起床は六時を少し過ぎていた。追回し共も仕事はしないものの何分一昼夜半睡眠を取っていないので見張り奴が居眠ったらしい。いつもの時刻より遅れたのを粗良の女房が気付き起こしたものでらしい。

昨夜一つの事件が起きていた。一人の仲間が逃走したのだ。三尺程の土間を離れて追回し共が寝ている、奴らは外に出たい時は見張りに合図していつでも自由に外に出られるのだ。奴らは内と外で監視しているのだ。さすがに昨夜は追回し共もぐっすりだったのだ。

昨夜逃げた仲間はイビキの大きな男だったらしい。追回し共がイビキが大きいといってなぐったらしい。すべての自由を奪われ、激しい強制労働をさせられた上、眠る事までも

奪われた仲間はずさ苦しかっただろう。一昼
夜半の運送労働後も眠らずにすぎをうかがい、
窓の外の金網を叩いて逃走したのだ。何を道
具に使ったのかわからないが、一心になった
人間の能力と体力は大したものだと改めて感
じる。窓が破られ逃走したので今日は鉄コウ
ウシにするらしい。

今朝も俺達を運んでくる時に騒動があった。
曾根崎の近くで車が止まった時、仲間の一
人が逃げだす、そして追回しが追ったが曾根
崎署の中に逃げ込んだのだ。あれだけ解け難
いように結んであったはずのロープをどうし
て解いたのか謎である。

作業現場はどうやら本町にあるようだ。地
下に追い込まれた俺達の仲間の中から、みぞ
かな、ささやきが聞こえる。「兄刺逃げた男
は必ず理由を話さるうし、俺達は働いた金
も貰い、堂々と帰れるかもしれんぞ」。

俺は半信半疑だった。けれどももしかしたら
という期待もあった。騙されるのは労働者の

常、期待ははかなく消え、何の音沙汰無し。
追回しや組長兄弟三人を少し動揺させただけ
で終りそうだった。

今日も一日の作業を終え、飯場に帰りつく。
風呂のある日であった。一日おきにあるそう
だ。風呂と言えは聞こえは良いが、俺達の風
呂は一人三升足らず、どこも流えずただ湯に
つかるだけ、張子の追回し共が外は寒いから
俺達を早く上げらすのだ。

（次号（下）につづく）



労働者救世十ノ月
毎月読もう??

